

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

真・悪魔転生〜皆殺しのNUTRAL〜

【作者名】

OX003

【あらすじ】

女神転生の世界、シンジユクバベルを駆け抜けたデビルバスターが
ハイスクールD×Dの世界、イツセーの友人として転生！
悪魔をも凌駕する非情のニュートラル道を駆け抜ける！

プロローグ・転生

私、松田一郎はこの世界の人間ではない。

死して生まれ変わったのだ。私のいた世界はほんの二十数年前までは平凡なものだった。

だが、あの一発のICBMが全てを変えてしまった。

いや、その前から予兆はあったのだ。吉祥寺連続殺人、軽子坂高校事件、そして……悪魔召還プログラム。

あの日、あのICBMの日から世界には悪魔や天使、神々が溢れ人々を翻弄した。

いや、そんな生易しいものではない、虐殺だ。

幾たびの戦乱を私は潜り抜け、悪魔と戦ってきた。

戦況は厳しい。聖書の神と天使たちのLAW勢力、悪魔たちのCHAOS勢力。

そして、人間たちのNEUTRAL勢力。

戦乱の世の中にあつて人間は長い者に容易に巻かれる。

ましてや、天使や悪魔の加護は人の強さを簡単に跳ね上げる。

人であっても神や悪魔に組するものたちがどんどん増えていった。

連中は簡単に人間をおもちゃにする。逆らえるのは力ある者のみ。

地獄だった。

その中での英雄が出てきた。

CHAOSに行った友人の忠告を無視し、LAWに行った友人を無視し、

そうして彼らを殺し、彼らをそこまでおいつめた天使も悪魔も殺し

つくして一応の均衡を作り出した。

世は……少しだけ、ほんの少しだけ平和になった。

人間でも力を得て、悪魔と対等になれ、再び文明を得るチャンスのある平和が。

だが、私はその完成を見届けることなく戦士として敗れて死んでいった。

新宿バベルの建設途中だったか。

まあいい、とにかく悪魔や神の世界で世界はめちゃくちゃになった。

そうして私はその戦いの中で死んでいった。

だが……生まれ変わった世界では、『まだ』悪魔も天使もその影くらいしかない。

あの平和な、限りなく尊い20世紀の文明世界だった。

生まれ変わってから私は徐々にこの世界の私となじんでいった。

今ではもう、どちらが元々の私か解らない。

しかしデビルバスターとしての私はこの世界の私を乗っ取ってしまつた悪魔と変わりない存在だとは思つ。

だが、親やこの世界の自分に悪いとは思いつつも生き方は曲げない。

悪いとは思つが、それだけだ。

どっちも私なのだ、有用な知識として活用させてもらつ。

私はちよつと秀才なくらいで普通の子供を演じつつも、この世界のことを調べた。

細かいところは違つが、やはり前の世界の20世紀くらいの文明

だ。

だがこの世界では起こるべき悪魔の事件が起こっていない。
ならば悪魔はいないのか、いや、いるようだ。

本好きな子供という演技から私はオカルト関連の書籍や果ては大学のフィールドワーク論文まで目を通した。

やはり、いる。

神器（セイクリッド・ギア）という存在、悪魔の駒、聖剣、妖怪。いくつかの文献であきらかに実在しているだろうという証拠を突き止めた。

ならばどうする。私は目を閉じ耳をふさぎ、平穩の中に生きるか？それもいい。尊く、安らかで、なにより誰の迷惑にもならない。だが私はこの世界でもデビルバスターとして生きていくことにした。

平穩は連中の身じろぎだけで軽く吹き飛ぶものだ知っているからだ。

その時になってさあ力がありませんではどうしようもない。

とはいえ、できることはそう多くない。

わざわざ古武道道場を探して両親に頼み込み体を鍛え上げるくらいだ。

同時に、あの世界で使えた装備も魔法も再び手にする必要がある。幸い、この世界には魔力も魔術師もいる。なんとかなるだろう。

そして……悪魔召還プログラム。

いやと言うほど弄ったから大体は覚えている。

パソコンの機能自体はICBM以前よりはるかに高いのだから問題はないだろう。

私は高校生になった、同級生といっしょに馬鹿をやったりしている。

私は主に力仕事担当だ。

馬鹿みたいな日常。楽しく尊い時間。

だがその日常に異物が紛れ込んだ。

リアス・グレモリー、ソーナ・シトリー。

奴らは悪魔だ。外面をどう取り繕うと私には奴らの気配がわかる。

奴らの取り巻きも同じく悪魔だろう。

それとなく調べてみれば出るわ出るわ。

グレモリーがああ72柱のグレモリーであること、奴の祖先がこの学校の設立に関わっていること。

不明瞭な金の使い道、関係者に多発している記憶の齟齬。

どうやら悪魔は想像以上に深く人間社会に根を張っているらしい。

私はさっさとオカルト部と生徒会の天井裏に忍び込み、盗聴器を仕掛けた。

これで連中の事は筒抜けだ。

おかげでかなりのことがわかった。

サーゼクス・ルシファー、禍の団、ライザー・フェニックス、聖剣計画、姫島朱乃の両親のこと。

断片的な情報から真実を組み立てていく。あとは地道な裏付け捜査だ。

おかげでよくわかった。悪魔共も神も人も腐れ果てている。

対抗すべき人間も聖剣を弄繰り回したり、英雄派などと餓鬼の遊びに興じている。

停戦による平和ボケといえは聞こえがいいが、これはむしろ退廃と

いづべきものだろう。

危機感があまりにも欠けている。その癡狂気と傲慢さは無駄に満ちているから性質が悪い。

よく解った、うんざりするほど解った。

奴らは人間の命と人生を雑巾程度にしか思っていない。

悪魔の駒はまさに悪魔の発明だ。

適当に眷属に出来るシロモノで、おまけに眷属は奴隷かアクセサリー程度でしかない。

悪魔の気分次第で誰もが簡単に悪魔の奴隷になりうる。

種の繁栄、保存を歌っているがなんのことはない、奴隷を増やして勢力を水増ししているだけ。

その奴隷が台頭すればあの汚らわしい純血主義とやらで押さえつける。

だが一つ収穫はあった。リアス・グレモリーはまだしもまともらしい。

悪魔にすれば、だが。

眷属を人扱いというか悪魔扱いしている。ある程度の人権を認めているのだ。

その点は少し見直したが、逆に言えば他のやつらは軒並みあのICBMで出てきた連中と同じような奴らだとよくわかった。

だが、そのグレモリーとソレに近い感性を持つソーナでさえ訳ありとはいえ幼い連中を平気で裏の世界に巻き込むのだ。

私の覚悟は決まった。

神討つべし。悪魔、降すべし。

一人たりとして神も魔も狂信者も生かしておけない、

人間の世界の事は人間が決める。神も悪魔もいらぬ。もちろん

私もだ。

本編開始・DBカミウチの誕生

事の始まりは友人の兵籐一誠に彼女ができたという話だった。それはいい、喜ばしいことだ。

だが、におう。

あの忌々しい天使どもの魔力の匂いがする。杞憂ならばいい、だが見極めさせてもらおう。

それにしても何が楽しくてカップルを尾行しなければならないのか。

前世と今世で身に着けた潜入・穩行技能の全てを使って隠れているが虚しくなってきた。

だが、一つ収穫はあった。天野なんちゃらという兵籐の彼女はまぢがいなく天使か墮天使で、兵籐に悪意があるということだ。

あのLAWのうさんくささを知っている人間なら解る。独特の偽っているような口調と気配がする。

おや、人気の無い公園に行くようだ。

「イッセー君。お願いがあるの」

「何？」

あのモーションと殺意はヤバイ。

「死んでくれないかな？」

ムド、いやハマ系か？ いやあれはヒートウェイブのような物理系だ。

黒い羽、墮天使か。

手に光る槍を持って一誠を見下ろす。その瞳には侮蔑が込められている。

だがその前に術の出がかりを潰す！

「ザー！」

光る槍は私の放った風の一撃により狙いがそらされた。

意識を戦士のそれに切り替える。

バックアタックだ、先制はもらった。

「お前は何？神器持ちかしら。邪魔しないでくれる」

「答える義理は無い」

「な、なんだよお前！夕麻ちゃんに何すんだ！」

説得する時間が無い。

「ドルミナー」

睡眠の状態異常を与える魔法だ。コンボにもつなげられる便利な技なので習得しておいた。

イッセーは崩れ落ち、眠ってしまう。

まあ、私が奴の友人だとバレなかったのは単純に変装していたからだ。

金髪のカツラ、帽子にバイザー、マスク。

服装も普段はしないヒップホップ系だ。

「やはり神器持ちの人間、でもお前はあっけなく死ぬわ。人間が墮天使に勝てるっても？」

「ならば反証してみせよう」

私は素早く踏み込むと防御を崩す拳の一撃を見舞った後背面から

さらに追い討ちをかける。

ひるんだ隙に魔法を詠唱する。

「タルカジャ」

「スクカジャ」

「テトラジャ」

「人間が私に触れるなんて！ありえない！」

「言った筈だ、反証すると」

「私を怒らせたことを後悔させてあげる！」

墮天使は光の槍を振り上げ、私に切りかかる。

素早く体制を攻撃から回避に切り替えて避ける。

隙を見ては筋力上昇（タルカジャ）の魔法を唱える。

「どうしたの？避けるばかり？」

「安い挑発には乗らん。私は私のやりたいようにやらせてもらう」

「調子に乗るな！コケにするのも大概にしなさい人間風情が！」

繰り出してきた槍にカウンターを乗せる。破魔無効（テトラジャ）のかかった腕でつかみ、相手の体に槍を突き立てる。

そのまま槍を奪い取り抜き取って思い切り叩きつけ、さらに接近し投げ技で転がし、関節を決める。

「貴様には聞きたいことがいくつもあるが、残念ながら今の私では生かしたまま貴様を捕らえるほどの余裕は無い。故に死んでしまえ」

「ま、待って！」

「聞けない相談だ」

首をへし折ると墮天使の体は一瞬ではじけて一枚の羽になってしまった。

なるほど、この世界ではこうなるか。以前の世界でもほつっておけばマグネタイトが霧散して悪魔の死体は残らなかった。

どうやらこの世界でも似たようなものらしい。

実に都合がいい、便利だ。

「わたしもあなたに聞きたいことがあるわ。あなたは何者？」

「……グレモリー、なるほどゴモリーか。72柱の56番目の公爵だったな？」

後ろからかけられた声はたしか、オカルト部のリアス・グレモリーだ。

私が悪魔の存在を確信した証拠の一つだ。

「いや、質問に質問で返すのは礼を失するか。言うておくがわたしは神器持ちなどではない。

ただの魔法を知っているだけの人間だ」

「話が早いわね、でも神器の存在を知っているって言うことは裏の者なんでしょう？」

「ここはこのリアス・グレモリーの管轄よ。知らないってわけには行かないの」

振り返るとやはりそこにいるのは赤髪のグラマラス。

リアス・グレモリー。忘れもしない、あの悪魔の気配を持つ女だ。

さて、名前を名乗らねばならない。そうだな、あの英雄のようなニユートラルの象徴……

神、討つべし。悪魔、降すべし。

「……神討降魔（カミウチゴウマ）とでも呼んでくれ。連絡先はこのメールだ。これでは不足か？」

私はポケットに入れておいた軍用ボールペンでメモに使い捨ての

メールアドレスを書き込む。

「ええ、不足だわ。あなたの立ち位置をはっきりして欲しいの」

「だろうな、今は敵対する気は無いし、何処に属しているわけでもない」

「あなた狙われるわよ」

「そうだろうな、だからこうして顔を隠している。

それで察してくれ、今は正体を明かす気は無い」

私はどうなってもいい、だが家族は巻き込めない。

「あきれた、そんなもので隠し通せると思ってる？」

あなた、もしよかったら私の眷属に……」

グレモリーの声色には心配するような響きがあった。

なるほど、庇護下に入れと言っことなのだろう。

ふん、慈愛、慈愛ね……

「断る、嫌だ、ふざけるな。会って30秒で眷族になる奴がいるか」

「それもそうね、その辺も含めて今後のことを詳しく話し合いますよ」
「う」

私は先手を打って場所を指定した。グレモリーはオカルト部で話し合う気の様だが、相手のホームグラウンドで話し合う気はさらさらない。

「場所は「こちらで指定させてもらおう。ジョリー・ロジャーで会おう」。

日時はこちらで決めてもらってもいい。だが、お互い学生の身だ。放課後か土日がいだろうか」

「ええ、じゃあ明日の放課後、7時に。ところで、そっちの彼を保護してもいいかしらっ」

兵籐か。墮天使に狙われると言うことは何かしらあるんだろうが

……
このままにしておくわけにもいかない。

グレモリーが保護してくれれば助かるが、悪魔に友人の身柄を預けると言うのは気が引ける。

信用がおけない。

「勝手に契約なり眷属なりしないというならばな。食らうと言うならばお前を滅ぼす。何年かけようと必ずだ。

一切の害を及ぼさないというならば構わない」

しばらく話してわかった。この悪魔はお人よしなタイプだ。悪魔にとって約束など紙切れにも等しいものだとはわかっている。だが、このタイプはチャンスさえあれば誘惑してくるものの、脅しておけばとりあえず怯むタイプだと私は経験上知っている。

「厳しいわね。いいわよ、約束しましょう。彼に危害は加えないわ」

「いいだろう、ではさよならだ」

「ええ、ごきげんよう」

そうして私は逃走用魔法を唱える。

「トラエスト」

「……瞬間移動？ やっぱり神器使いかしら、そうじゃなければ相当な魔術師ね」

公園には、グレモリーのつぶやきだけが残っていた。

悪魔TALK

翌日、喫茶店ジョリー・ロジャー。

私は天使、墮天使、悪魔の三大勢力に悪魔の駒の話グレモリーから聞いた。

「というわけで神器もちは狙われやすいのよ。あなたは本当に神器持ちじゃないの？」

「くどい、これは俺の知っている魔法だ。」

情報源については聞いても仕方のないことだ。このやり方を知っている者はおそらく今はいない」

「そう、でもどの道あなたは墮天使に狙われることになるわ」

「俺自身はなんとでもなる。問題は兵藤だ。眷属とやらにするのか？」

「ええ、あのまま放って置いたらどの勢力からも狙われることになるわ。」

それともあなたが彼を守りきれる？」

その顔は勝ち誇っているようだった。

そのとおり、あの女好きに事情を説明したとしよう。

私は奴の彼女を殺した相手としか映らない。

もしも奴が私の話を信じたとして、まともに努力するだろうか？

いつ来るかもわからない敵とやらを相手に？

奴が本気になるとしたら全てを失った後だろう。

だがそれでは遅い。

しかし、友人が悪魔になるのを見過ごすと言っつのは……

決断の時だ。

見捨てるか、助けるか。

「奴が契約するかどうかは奴が決めることだ。

だが、条件がある。差し出がましいようだが、奴に説明する際にも同席することと、発言権を許して欲しい」

「そう、じゃああなたはその対価に何を差し出すのかしら？」

「私の扱う魔法を全て差し出そう」

「そう、悪くは無いわね。でもいいのかしら？」

あなたは手の内をさらす事の危険を解っているとおもっただけれど」

「何が言いたい」

「どの道調べればすぐにはれるのよ？ 正体を教えるほうが得策じゃないかしら？」

「その場合は俺の行くことにいくつか協力してもらいたい」

「話し合う余地はあるということね」

「ああ、それは……」

私は条件を言った。

「あなた、正気？」

「さてな、だがこのくらいの覚悟なくば成せることも成せん

それと、言うておくがわたしはいざとなれば「彼ら」も見限って行動するぞ」

「私から言うておいてどっかと思っけど、本当にいいの？」

「これをしたらあなたは……」

「遅かれ速かれ、だろっ？ ならば今のうちにおいた方がいい」

「解ったわ。これは契約ではなく取引あつかいにしておいてあげる。

でも、最後に一つだけ聞かせて。あなたは一体何を成すつもり？」

私は少しだけお茶を濁した回答をすることにした。

「……神と悪魔が人類を巻き込んで最終戦争を行う可能性を一つでも

減らしたい。

できることなら、神と悪魔の戦いに人類を巻き込ませたくない、それだけだ」

「そう、ならあなたが何かしなくともすでに三大勢力は戦争を回避する方向に行っているわ。

私はあなたが心配よ。「人類」っていつでも会ったことの無い他人でしょう？

そんな人たちのためになぜあなたが戦うの。たった一人になってまで」

痛いところを突く。だが私の戦いは賞賛をえるためのものではない。

憎しみだ。貴様らのような存在への耐え難い憎しみゆえに私は戦うのだ。

「……私の心配が杞憂ならばいい。だがきつとお前たちは人間を巻き込んでいろいろとやっているのだから？」

私はどうもそれが許せないのだから。人間は神の玩具でも悪魔の糧でもない」

「……」

グレモリーは絶句してしまった。

そうだろうな、あの世界を知らなければ狂人の戯言にしか聞こえないだろう。

一個人が世界の趨勢をどうこうできるものではない。だが私はやる。できるできないではない、やらねばならないのだ。

「まあいい、戯言とでも思ってくれ。それでは、その件はよろしく頼んだ」

「ええ、悪魔は取引は誠実に実行するわ」

かくして私、松田一郎は死人となった。

結論から言おう。私は社会的に死んだことになった。事故の記憶を偽装して公的な書類を全て準備したのはグレモリーだ。

家族も私が死んだという嘘を信じてくれている。ちよつとしたトリックなのだが。

電話でひき逃げ事故にあつて死んだと家族に連絡し、グレモリーがなにやら適当に調達してきた死体と対面させたただけだ。顔は適当に潰しておいた。

それで皆が泣いた。

私にとつてもつらいものだった。

だが、私は神の軍勢とも悪魔とも戦うことを決めている。どっちにしろ、後戻りする気はなかった。

松田一郎は死んだ、覆面をかぶった時にはもう神討降魔になっていた。

そうして、私はイッセーとの説明の場に同席することとなる。

「私たちオカルト部はあなたを歓迎するわ。悪魔として」「えっああ、はい」

それからグレモリーによる墮天使と悪魔、神器の説明を私は黙って聞いていた。

兵藤は実に高校生らしい反応でおっかなびっくり聞いている。相変わらずリアクションが面白い奴だ。

「それが神器、あなたのものよ」

ふむ、己が最強と思う姿を念じて出す、か。なるほど合理的だ。私ならば何だろう？ミトラあたりか。いや悪魔ではない。

やはりあの英雄だろう。ヒノカグツチをもち足に神経弾を装備した最強のデビルサマナー。

「あなたはその神器を危険視されて、墮天使、天野夕麻に殺されかけたの」

さて、心苦しい瞬間だ。だが、言い訳はすまい。

「いや、あの時たしかに死んでくれる？とか夕麻ちゃんは言ってその後俺は意識がなくなったけど……」

その前になんか変な奴が乱入してきたような」

「ああ、それはね……」

グレモリーが困ったような顔をした。

「私が殺った。お前が殺されそうになったから、私があの子を殺した。それが全てだ、信じるかどうかはお前次第だ」

「お前が夕麻ちゃんを殺したって？それに墮天使？悪魔？信じられねーよー」

「いいえ、私たちが悪魔というのは本当のこと」

グレモリーが翼を広げてみせる。
忌々しい蝙蝠の羽だ。

「マジか。いやでも神器も出て来たし……全部、本当なのか？」
「嘘は言っていないし、隠し事もない」

「ここでグレモリーは笑みを深くして兵籐に囁き掛ける。

「あなたにはいくつか選択肢があるわ。私の眷属になって悪魔として生きる道。

そのまま何もせずと墮天使達に狙われる道。
契約者となって私の庇護下に入る道。

お勧めは最初のと最後のね。一度力に目をつけられてしまったら死ぬまで追いかけられることになるわよ」

「俺、殺されるんですか」

「そのままだと間違いなくね。それに私の元にくればあなたの新しい生き方も華やかなものになるかもしれないわよ？」

グレモリーはウィンクする。

まあ、悪魔ならばそう言うだろう。だが私は人間だ。

「……兵籐、言うておくが眷属になったらほぼ死ぬまでその悪魔の下僕……奴隷になる。」

そのグレモリーは奴隷扱いまではしないだろうがな」

「う、うーん……美女の下僕というのもそれはそれで良さそうだけど、納得は出来ないなあ……」

「でもね、悪魔には爵位っていうものがあるの。私も持ってるわ、生まれ育ちも関係するけど、成り上がりの悪魔だっているわ。最初は皆、素人だったのよ」

「本当ですか？ いまいち信用できない」

そこでグレモリーは兵籐の耳に顔を近づけて耳打ちする。
アレは女に免疫のない奴では敵しかろうな。

「やり方次第ではモテモテな人生をおくれるかもしれないわよ？」
「どっやってですか?!」

そら、食いついた。なんと言っか、高校生だな。
割ってはいろっ。

「……人から悪魔に転生した者でも功績によっては爵位が与えられる
こともある。」

だがな、兵籐。これは開放奴隷みたいなものだぞ？

コロッセオの剣闘士は知っているだろう。あれのチャンピオンは
解放され、市民権が与えられる。

そういうようなものだ。ごく一握り……5%未満の勝ち組という
エサ、理想に過ぎない。

このグレモリーは別だが、大体がそのまま奴隷として使い潰され
る」

奴のいう台詞を先取りしてやった。

当然、グレモリーは俺を睨むが知ったことじゃない。

「カミウチ。その言い方はないんじゃないかしら？」

あともうちよっと多かったはずよ。

イツセー、悪魔は神々との戦争で数が大きく減ったわ。悪魔は出生
率が低いから。

だから素質のある人間を下僕として悪魔に引き込むことで数を回
復させて来た。

それは事実よ。でもね、それは力のある悪魔を再び存在させるため
なの。

たしかに一握りの勝ち組かもしれない、でもそこに入ってしまったえば認められるわ。

悪魔は力ある者を認めるものよ。ハーレムだってやってもいいものなの。」

兵藤はうんうん言いながら話を理解しようとしている。

「う、うーん、あんまり自信はないけど、やり方次第では俺も爵位を？」

「ええ、不可能じゃないわ。それ相応の努力と年月がかかるでしょうけど」

「エ、エッチなこともしていいんですか!？」

「あなたの下僕にならないんじゃないかしら」

「心がぐらつくなあ……」

相変わらず下心に素直すぎる奴だ。奴は間違いなくCHAOS属性だな。

もう一つ釘を刺しておこう。

私は奴を悪魔にさせる気はさらさらない。

「落ち着け、兵藤。下僕にならば迫ってもいいということはおおよそ下僕は何をされても拒否権がない、文句を言えない存在だということだぞ。」

お前はそんなものになってもいいのか。それと、この現実で這い上がれない奴が悪魔の世界で成り上がる？

夢物語も大概にしる。人間の世界より悪魔の世界は厳しいぞ。だいたいにおいて戦いと切り離せん。

そもそも、下僕になった転生悪魔が成り上がる方法なぞレーティングゲーム……こつちでいうサバイバルゲームを実弾使ってやるようなゲームで勝ち続けるしかない」

「なにその危なさそつなゲーム!?命がけなの？」

「いいえ、ちゃんと審判もいれば回復魔法もあるわ。」

スポーツの一種みたいなものよ。ボクシングだって殴りあうけど死ぬことはあんまりないでしょう？

っていつかカミウチ、ここは私の部室であなたは客分。それを忘れていないかしら？」

そろそろ引きどきか。黙っていよう。

「発言権を許したのはそちらだろう？だがたしかに礼を失していたな。黙っていよう。」

それと一つフォローを。こいつは下僕を奴隷扱いするような奴じゃない。

下手な奴に目をつけられて眷族にされるよりはましだろう」

ここで俺の存在を思い出したかのように兵籐はたずねる。

「あの、カミウチってそいつもやっぱり悪魔なんですか？」

「いいえ、彼は人間。だけどあなたと同じで特殊な力を持っているわ。分類としては魔法使いでいいのかしら？」

「その扱いで構わない。格闘もそれなりにできるが」

「紹介が遅れたけど、彼は神討降魔。私の客分よ」

「へえー」

すごくどつでもよさそうだった。

まあ、そうだろうな。

「それで！あなたの立場はいますごく危ないの。」

神器もちほだいたい大成功するか、利用されて狙われるかのどつちか。

あなたはすでに狙われる側よ。いつどの勢力に殺されてもおかしくないの。

最悪、死んだほうがマシな人体実験をされたりするかも……」

グリモリーが口調と論旨を変えて今度は脅しにかかる。
だが、事実でもある。

「ゲッ、マジですか」

ここでグリモリーは木場にちらりと視線を送る。

「部長の言っていることは本当だよ。僕はそういう人を何人も見てきた。

それに、神器を狙って抜き取られる場合もある。神器を抜き取られたら人は死ぬんだ」

なるほど、経験者は語る、か。

リアリティはあるだろうな。

「実際、あなたはすでに狙われたでしょう？今回は運よく無事だったけど、次もそうとは限らないわ。

下僕になれとは言わないけど、保険はあったほうがいいでしょう？私の契約者になれば庇護を約束するわ。危なくなったら私が必ずあなたを守る

それにもし死んでしまっても大丈夫！転生悪魔って言ったでしょう？

死んだ後すぐなら悪魔として復活できるのよ」

「なんだか保険のCMみたいだなあ……うーん、じゃあ今回はそれで。女の子に守ってもらって言うのもしゃくだし……」

もし俺が死んだら悪魔になるっていうのでどうでしょう」
「もちろんよ。それに悪魔の女の子は美人が多いわ。

その神器も多分戦闘用よ。鍛えればそれなりになるはず。

力さえあればモテるわよ？そこでオカルト部に入っておけば悪魔の世界に行き放題！

普通の人生じゃめったに味わえない面白い体験が出来るわよ！今ならこのオカルト部入部セットプランがお勧め！」

「た、たしかに皆美人だ……じゃあ俺そのプランで！」

「交渉成立ね。さあ、契約書にサインして」

ああ、とうとう奴はサインをしてしまった。

まあ、この辺が落としどころか。

その後なんとなく雑談をしてこの場は解散となった。

「カミウチ、ちょっと後で来なさい」

「ああ、解っている」

はぐれ悪魔

その後幾つか小言を言われたが、取引で発言権を認めたことを盾に言い逃れをした。

さて、とりあえずの宿として旧校舎を使っていいと言われていたが生憎悪魔の世話になる気はない。

たしか町外れに廃墟と、廃教会があったはずだ。

教会に行ってみるとどうも先客がいるらしい。

会話からするとはぐれエクソシストか？

墮天使もいるようだな、先日殺した奴の仲間か。

廃墟に行ってみると悪魔の気配がした。

だいたいスギナミ坑道くらいだろうか？

「美味そうな匂いがするぞ。甘いのかな？辛いのかな？」

「一応聞いておく、誰かの眷属か？」

「黙れ小虫めええ！私は自由だ、誰にも傅いたりしないいい！！」

「そうか、貴様もそうなるまでいろいろあったのだろうか。」

「貴様は哀れだ、だが許さん。貴様は人を食った」

目を凝らすと廃屋の中に人の骨が転がっている。

ずしん、ずしんと重たい足音がして上半身は女、下半身は獣の姿を持つ悪魔が現れた。

大きさはおおよそ5mほどだろうか。両手に槍を持っている。

まあとりあえずアタックナイフを抜き放ち、敵の足を駆け上って指を切断する。

槍が落ちたので拾って奴の顔めがけて三連で突きを放つ。

スイカにフォークを刺す様にあっけなく奴の顔が吹き飛び巨体がぐらりと倒れる。

「弱いな、坑道のガルムくらいか？」

消滅する前に使えそうな「パーツ」を剥ぎ取っておく。

それから槍も確保しておく。

廃墟の掃除には3時間ほどかかった。

小汚く、死体があった家だがまあ雨風はしのげるだろう。

死と戦乱の渦巻くあの20年の間では死体と枕を共にすることなどざらにあった。

今更気にはしない。

それよりも槍だ。あの悪魔用だったので人間の私が握ると少し大きすぎる。

ふむ、片手剣に仕立て直せば丁度いいか。

あの世界のように便利なりサイクル用品はないがまあやれるだけやってみよう。

「俺が悪魔になるとしたら駒は何ですか？」

「そうね、あまっているのが僧侶と兵士だから……兵士かしら。

僧侶って感じでもないしね」

「なんか弱そうですね、兵士……」

「そんなことはないわよ？ いいイッサー兵士と言う駒はね……」

外から話し声が聞こえてきた。

あれはリアス達とイッサーだな。

大方、ここのはぐれ悪魔を狩りに来たのだらう。
初心者へのレベルリングと言うやつか。

「この家に何か用事か。リアス・グレモリー。」

生憎と家主はもういない」

「カミウチ……貴方がいるって事はここのはぐれ悪魔はあなたが殺したのね？」

「一言断っておくべきだったな。それとも、知り合いだったか？」

「いいえ、討伐対象だったわ。でもそうね、一言言っておいて欲しかったわ」

「それはすまなかった。次からはこの町ではぐれ悪魔を狩る時には言っておこう」

少々気分を害したようだが、まあ構わない。

要は決定的な決裂にならなければいい、そして別に私はいつまでもモイツが必要と言うわけでもない。

だが、機嫌はとっておくべきだらう。

「それから一つ忠告しておく。町外れの廃教会にはぐれの神父らしき連中が結構な数いた。

この間イツセーを襲った奴の仲間だらうな。貴様らの関係を考えれば無闇に手出しはしないだらうが……

一応気をつけておけ」

「そう、」忠告ありがとう。皆帰るわよ」

「重ね重ねすまん。雑魚悪魔でよければ私が出すが？」

「あなたに眷族がいるの？」

「シキガミだ。作り方を知ったので作ってみたが案外上手くいった」

そう、あの世界でガイア教徒がシキガミを作っていたように、この世界でも式神はあった。

私もある程度シキガミの作り方……悪魔の作り方を知っている。

足りない部分はこの世界の式神の作り方で補った。
失敗した者はスライムになったので無駄がない。

「それとスライムもいる。やってみるか？」

「そうね……レーティングゲームの練習にはなるかしら」

「では早速出す。派手な登場になるが驚かないでくれ」

そうして私は改造スマートフォンからあるアプリを起動させた。

そう、「この世界で唯一存在する「悪魔召還プログラム」を！

「召還、シキガミ。召還、スライム」

雷が落ちて、その中からシキガミとスライムが出てくる。

シキガミは白い帯に顔を書いたような代物、スライムは緑色のドロに赤く光る眼があるだけのものだ。

「それから言うておくがシキガミは電撃無効で、スライムは突きが効かないように出来ている。」

それ以外は普通に効くので遠慮なく倒して構わない」

リアスたちはやる気に満ちた顔で私の仲魔を取り囲む。

「それじゃあいくよ！まずは僕からだ！」

それから先は単純なワンサイドゲーム。

私は何度も蘇生呪文（リカーム）を使う羽目になった。

「……とまあこんなものかしら？どう？悪魔の力はイッセー」

「すげいですね……」

「まあ、あれだけの回復と蘇生魔法を使いこなすカミウチも相当なものだけだね。」

皆、お疲れ様」

「満足いただけで何よりだ。私はしばらくはここをねぐらにする。構わないか？」

用があれば言ってくれ」

「ええ、構わないわ。おやすみなさい」

リアスたちは好きなだけ大暴れすると帰っていった。

実際、休まなければ魔力が回復しない。

リカームにディアラマと結構使ってしまったからな。

このくらいのゴマすりはおこう。今はまだリアスたちと事を構えるべきではない。

これでご機嫌は取れたはずだ。

Battle

イッセー、悪魔である私達は墮天使たちに手は出せないわ。

そして、あなたが教会に行くのも止めなきゃいけない。

神器を使いこなせていない人間であるあなたが行っても殺されるだけよ

そうですね……部長達を巻き込みはしません

待ちなさいイッセー！……カミウチを頼りなさい。

私の名前を出してもいいわ。

それから、私はしばらく席を外すわ。

皆、自由に行動しなさい。悪魔は自らの欲望に忠実な者だから

ふむ……なるほど。神器もちのシスターを助ける、か。

正直メシア教徒じみたやつらは皆死んでしまっただけがね。

だがまだ人間だ。動く価値はある、か……リアスへの貸しになるだろうしな。

それに、あのはぐれエクソシスト共は少しは見所がある。

まだまだLAWから脱し切れてはいないが、真のNUTRALになれる素質を持っている。

この際だから組織を作ってしまったおう。

まあ、駄目だったら皆殺しだな。

さて、用意をしておくか……

「カミウチ！すまねえ、力を貸してくれ！」

「落ち着け、何があった？」

「アーシアって友達が墮天使に神器を抜き取られそうなんだ！」

ほっとくわけにはいかねえ、たのむカミウチ！力を貸してくれ！」

ふむ、奴らしいストレートな頼み方だ。

「構わない。だが、いくつか条件がある」

「条件って？」

「一つ、敵の生死は問わない事。これは生かして抑えるのは難しいからだ。

二つ、倒した敵の処遇は俺に任せること。いわば捕虜だな。倒した奴が責任を持ってどうにかするということだ」

「あっああ……俺はかまわねえけど。皆は？」

「そうだね……カミウチさん、君は捕虜をどうする気だい？」

「安心しろ。お前達の害になる使い方はしない」

「答える気はないんですね」

「ないな。それとも一つ。これはリアスへの貸し一つということでは構わないな？」

「なっなんで部長が！」

「本来、あいつの管轄内の出来事であり、あいつが当たるべき案件だからだ。」

俺やお前、部下の自由行動ということでは責任を放り投げてはいけない。

あいつが出向いて抗議すべきことだ」

「それは僕の一存では決められないな……」

「まあいい。リアスに伝えてくれればかまわない。

だが、要求するからには見返りを出すのが私のやり方だ。

「これをやるっつ」

俺は幾つかの記号が書かれた石をイッサー達に渡した。

「この赤いのがアギストーン。炎の魔法が込められている。

黄色がジオストーン、雷だ。青がブフストーン。氷の魔法が入って

いる。

使い方は簡単だ。攻撃する意思を持って投げればいい」

「こんなに沢山、いいのか？」

「作るのとはそれほど難しくはない。それから今から力を増幅させる魔法を使う。

マハタルカジャー！」

赤い光がイツセーたちの足元からあふれ出る。

「すげえ……なんか力がみなぎるぜ！」

「だが10分ほどしか持たん。突入前にこれと同種の魔法を4回重ねがけする。

「これで要求分は釣り合はずだが」

「アーシア・アルジエントは捕虜に入っていないね？」

「ああ、そっちで好きにするといい」

「ならいいんじゃないかな」

「じゃあ行こうぜ！いそがねえと！」

カジャ系魔法を重ねがけし、イツセー達は教会の扉をくぐった。

「ご対面！再会だねえ！感動的だねえ！」

あれは確かフリードとかいうエクソシストだったか。

「俺としては二度会う悪魔はいないって事になってんだけどさ！

ほら俺メチャクチャ強いんで初見でチョンパなわけですよ！

一度合ったらその場で解体！死体にキスしてグッバイ！それが俺の生きる道でした！

それがお前らのせいでメチャクチャだよ……俺のスタンスと人生

設計がメチャクチャだよ！

だからさ、ムカつくわけで！死ぬと思うわけよ！つーか死ぬクソ悪魔共！」

「……下品」

「てめえらあの悪魔に魅入られてるクソビッチを助けに来たんだろ？

とりあえずその人間のお前も悪魔に肩入れしてる時点で死刑確定！」

「おい！アーシアはどこだ！」

「んーその祭壇に地下への道が隠されておりますぞ」

「そうか、それだけ聞ければ問題ない。麻痺呪文（シバブー）」

窓に張り付いて様子を伺っていた俺はさっさとフリードに向けて麻痺呪文を打ち込んだ。

黒い光がフリードに向かうと黒い刺のような魔力光が奴を包む。

「なんじゃこりゃー俺を縛ってボコるつもりですかー！

さすが悪魔！悪魔汚い！」

「……先に行け。この拘束は1分ももたん。

コイツを処理したらすぐに行く。急げ！」

「サンキューカミウチ！」

イッセーたちは先へと急いだ。

さて、と……じゃじゃ馬慣らしと行くか。

「さて、拘束が解けるまであと50秒ほどか。

フリードとやら、少し話すことがある」

「何でしょうか！俺としては悪魔とつるむ奴に話すことなんか1mmもない所存であります！」

「利用しているだけだ。神も悪魔も天使も墮天使もすべて殺す。教会

の狂信者共も生かしておかぬ。

貴様にはわかるだろう。悪魔はもちろん、天使も堕天使も、教会も腐敗しきっていることが」

「あーあーきこえなーい。今俺の頭にあるのは俺の拘束が解けたらこの余裕こいちゃってる魔法使いさんをどうぶつ殺してやるかしかないんだよー」

「教会は腐っている。それは教会から抜けたお前が一番よくわかっているはずだ。

悪魔はクソだ。

しかしだからといって堕天使がまともなわけはないな？

やつらは人を殺す。神器をコレクションするためにな。

おまけに悪魔とも和平をしようとしている。

連中、人間をゴミほどにも思っていないぞ？

なぜ生かしておく。なぜ殺さない!!」

「悪魔を殺すのが俺のマイウェイなんですー。堕天使とかしらんちよ。

あいつら俺に悪魔を殺すための武器をくれる人たちですし？

お前こそなんでもあの悪魔共を殺さないんですかー」

「お前の堕天使とやらは人を殺しにかかってきた。

あの悪魔たちはまだ人を殺してはいない。

だから俺も今はまだあいつらを殺さない。それだけだ」

「悪魔は悪魔っただけで生きてる価値ないんですけど？」

「そつだな、その通りだ。これ以上は無意味だな。

俺は貴様らを手に入れる。そして教会も悪魔も堕天使も天使も皆すべて生かしておかぬ」

「プゲラ、妄想とか超痛いんですけど」

「ならば試せ。逃げるなよ。貴様がどこに逃げようと必ず突き止め屈服させる」

フリードにかけたシバブーが解ける。

「アンタみたいなガイキチに構ってる暇なんてないんで！バイちゃ
！」

フリードが閃光弾を振り上げようとする。

だがそれこそ俺の狙いだ。この手の奴はさんざん苦戦させられて
ダメージを与えるだけ与えたあと逃げる悪魔に良く似ている。

実際、メシア教徒もガイア教徒もはや人ではなく悪魔だしな。

悪魔合体できるし、COMPにも入る。人間としての一線を越えた
やつらはだいたいあなる。

こいつはメシア教徒ではないが、似たようなものだ。

故にわかる。さんざん殺しあってきた奴等と似ているからどうい
う手を繰り出すかよくわかる。

「貴様が逃げる場所はいくつも無い。窓かドアか、眼くらましをして
いる最中に隠れるか。

さもなければ転移魔法かのどれかだ。

そして貴様が逃げる場所にはあいにくとブフストーンが置いてあ
る。

貴様の氷結が解けるまであと20秒ほどだが……まあ、十分だ」

私はさっさとアタックナイフを振り下ろし、フリードの足の腱を
切った。

一度では切れないので5、6回ほど振り下ろし、ついでにノコギリ
のように斬る必要があったが。

「ぐっ、げあ、がああああ!!」

「残念だよ、フリード。まともに戦っていればきっとこんな事にはな
らなかった。

だが貴様はそついう性質（タチ）だから、逃げるだろうとも解って
いた」

そういう間にも私は奴の腕をガムテープでぐるぐる巻きにして、指錠を一個一個、指にかけていく。

手錠も3つくらいかけておこう。

ついでに剣と拳銃ももらっておく。これは便利な武器だ。

「さてフリード、貴様には言ってもらおう事がある。

私の仲魔になれ。眷属といってもいいな。

安心しろ、私は人間だ。だからこそ、悪魔より、堕天使よりずっと多くの者を殺すだろう。

共に来い、楽しめるぞ?」

「d i c k y o u r s u c k ! s a n o f a b i t c h
「!」

フリードは英語で罵言を返す。

「元気なのは良いことだ。まあ、これからお前は元気ではなくなっていくんだが」

爪に爪楊枝を差し込んでいく。これはどんな奴も根を上げる。

まあ実際耐えられない苦痛だ。されたことがあったからよくわかる。

「歯医者という拷問を知っているか?できればしたくない。

さあ、言うことがあるな?安心しろ、仲魔になっても好きに私の首を狙え。

構えない。こちらは代償を払い、お前には俺の敵と戦ってもらおう。そついう関係だ。俺はお前が戦えるのに必要なものを提供しよう。

堕天使と何の違いがある?さあ、言えよ。仲魔になると!」

「XXXXXXXXXXXXXXXX!!!」

「残念だ」

「さて歯が雑巾のようになってしまったわけだが……

まだ駄目か？まだ頷いてくれないか？

そうか、とても残念だ」

「ふむ……まあ目玉はいらないか」

「鉛筆削りという拷問を知っているか？いい感じの指だ」

「聞いたことはあるか……？ネイティブアメリカンは狩った相手の頭の皮をはぐという。

まあ私も何度かやったことがあるんだが」

「おい、聞こえているか？なあに心配するな。耳たぶがなくなっても耳は聞こえるぞ……それに私は回復魔法も持っている。

さて、そろそろ私も疲れてきた。お前の強情さには参ったよ。

悪魔の駒が偶然ここにあるんだがな。リアスから眷族にならないかと言われて持っていた奴なんだが……

どうする？俺はお前を悪魔にして無理やり使い魔にしてやってもいい。

選ぶのはお前だ。どうする？仲魔になるか。それとも悪魔になって眷属となるか」

「y・yes……」

「仲魔になるんだな？」

フリードがうなずく。

その瞬間、フリードの体が電子情報に分解されてCOMPに入る。

『はぐれエクソシスト・フリードを仲魔にしました』

やれやれ苦労した。だが、こいつはレベルを上げていけば中堅くらいの強さにはなるだろう。

下にいるはぐれ神父も何人が欲しいしな。

「やらばだ！人間！そしてグレモリーの娘よ！」

「さっさと逃げるっスー！やっぱり最初からこんな計画はムリがあったんすよー！」

床を突き破って何かが来た。墮天使共だ。

「マハブフー！シバブー！」

私は氷結の波動（マハブフ）を放ち、拘束呪文をかけた。

「うおりゃ あああ!!……あれ？」

イツセーが墮天使を追うように飛び上がってきた。

「見せ場を取ってしまったか？兵頭一誠。墮天使たちならばそこにいる。」

今ならば叩くだけで殺せるだろう。さあどうする？お前は殺すのか。それとも救うのか。あるいは放って置くか？」

その間にも私は墮天使たちを物理的に拘束していく。

「くっ殺せー！」

「いやっス！死にたくない！私は死にたくない！ああああああ!!」

男の墮天使、ドーナシークといったか。そいつは悪態をついてまだまだ元気だ。

しかし、ミッテルトとかいう女の方は完全に恐怖している。

眼に涙を浮かべ、必死ではいずりながら逃げようとするが、パニックで過呼吸になりそれもままならない。

さて、今更だが私はイツセーを戦いには巻き込みたくない。

よって少し悪役を演じることとした。

ミッテルトとやらは丁度いい。すでに屈服している戦意のない敵だ。

(おい、最後のチャンスだ。大げさに命乞いしろ、助かるかもしれんぞ？死ぬ気でやれ)

ミッテルトに私はささやく。

「神器はどうした？もう抜き取ったのか？」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

「まあ、アーシアにとってはその方が案外良かったのかも知れんな」

「てめえ！」

「今なら悪魔の駒で生き返るだろう。私が蘇生をしても生き返るかもしれない。」

ただの人間、ただの悪魔としてな。

呪われた才などよりずっといい。違うか？」

「ちょ、ちょっと待て！蘇生、できるのか？」

「知らなかったのか？」

「あ、ああ……じゃあ急がないと！」

「こいつらはどうする？逃がせばまたアーシアやお前を狙うぞ？」

殺すか、生かすか今選べ。生かすなら悪魔の駒で悪魔にでもするか、捕虜にでもしてもらえ。あのリアスに頼めば可能だろう。

お前が殺せないと言つならば、私が殺そう」

私はフリードから奪い取った拳銃をミッテルトに向ける。

単純なシナリオだ。イツセーに捕虜を生かすか殺すか選ばせる。

イツセーは戦意の無い敵を殺せるほどまだ非情には徹し切れないだろう。

だがそれでいい。「殺せなかった」「あるいは「不殺」という楔をイツセーに打ち込む。

殺さなかったという選択がイツセーの枷になる。

人でなしの人間と、人間らしい人間とを分ける最後の線になる。

「助けてください！命だけは許して、ゆるしてください！なんでもし

ます！

どんな事でもします！お願いします！お願いします！

うあああ……死にたくない、死にたくない、お慈悲を、お慈悲を

……」

「やめろ！殺せ！誰か薄汚い人間共や悪魔に跪くか！」

どうやらこの男は殺しておいたほうがいい。反抗的な敵を生かしておくとそれだけイッサーは殺しても構わないと思うだろうから。

ちょっとした演出のために私は床に溢れかえっているフリードの血をすくい、それでドーナシークの額にバツ印を描いた。

そしてそれにめがけて銃を撃つ。

「そうか、ならばお前は死ね」

銃声。ドーナシークは脳をぶちまけて死んだ。

そしておもむろにミッテルトにもバツ印を描く。

「あああ、うわああああー！あー！あー！あー！あー！！」

ミッテルトはもはや演技など関係なく、本気で死を確信し壊れたように泣き叫んでいる。

まるで赤子のような声だ。

「ちあどつするー！兵頭一誠！戦意をなくした敵をお前は殺すか？それとも救うか？」

私は喜悦さえにじんだ声でイッサーに殺気を向ける。

これでいい、これでイッサーは殺しに対し抵抗を覚えるだろう。

「このサイ」野郎！いい加減にしゃがれ！」

イツセーは神器のついた手で私の胸倉を掴む。

「だが、お前は先ほどまでこいつらを殺そうとしていたのだから？
殺すとは、戦うとはこういうことだ。私のようにになると言うこと
だ。」

殺人者というものはそういうものだ」

「ああわかったよー！言ってるよー！殺させねえー！

俺が頭を下げてこいつが助かるならいくらでも下げてやる！だから殺すな！」

「いいだろう、お前の決断を尊重しよう」

私は拳銃を下げ、魔法を唱えた。

「安心しろ、ただ眠らせるだけの魔法だ。ドルミナー」

「それよりアーシアを早くなんとかしてくれよ！」

「ああ、解った」

私達は蹴破られた床を下り、儀式場へと入る。

「イツセー！大丈夫だったのね。墮天使たちは？」

「ドーナシークはこいつが殺しました。ミッテルトはすいません……

俺はあんなになった奴を殺せねえ」

「イツセー？一体、何を見たの？カミウチ、その血……一体何をしたの
！」

「フリードは始末し、ドーナシークは射殺した。それだけだ。

過程や手段はこの際置いておけ。結果は変らん」

「カミウチ、貴方って人は……！」

「ところで、このアーシアだが私が蘇生しても構わないか？」

「待ちなさい、あなたは何を言っているの！」

「一応お前の許可が必要かと思ってな。おそらく蘇生できるが、できなければ悪魔の駒とやらで生き返らせてやれ。」

「お前はできるのだから?」

「え、ええ……そうね、まずはあなたがやってみて頂戴」

「なかなか賭けに出るな、リアス・グレモリー。だがその姿勢悪くない」

そして私は呪文を唱える。

「サマリカーム!」

光が恩寵のように降り注ぎ、アーシアは薄く眼を開ける。

それと同時におそらく神器であろう緑色の光がアーシアの胸に吸い込まれた。

「あれ? イッセーさん……」

怪訝そうにたずねるアーシアをイッセーは抱きしめていた。

「帰ろう、アーシア」

美しい光景だ。だが私はいくつか言うべきことがある。

「イッセー、お前はリアス・グレモリーに言うべき事があるな?」

「ああ……部長、すみません。あの時俺がアーシアを助けに行く時、部長が手を貸してくれないからってすごく失礼なことばかり言って

……

でも部長は裏でいろいろ動いてくれて……アーシアが助かった。

ありがとうございます」

「いいのよ。神器を持つあなたにはこれからもっと沢山の試練があるでしょうから、強くなりなさいイッセー。」

あなたには学ぶべきことが沢山あるわ。もちろん、見返りにこき使ってあげるから覚悟しなさい」

「はい」

「……まだもう一つあるな？」

「えっとその、働かって言ったそばからさらに借りをつくる事になるんですけど……」

ミッテルトを殺さないでやってください。俺にはあんな奴を殺せない」

「……カミウチ？」

「ああ、必死に命乞いしていたからな。もう心は折れているだろう。」

今助けてやればおそらくよく働くぞ？捕虜にでも悪魔にでもしてやればいい。

あるのだろうか？捕まえた捕虜を服従させる術や道具の一つや二つ」

「ええ、あるわよ。でもあなた、一体何をしたの？」

「見ての通りだ」

私は血まみれになった私の服を見せた。

「少しショッキングだったのかもしれない」

「そう、それがあなたのやり方なのね。カミウチ」

「人間らしいだろうか？」

「ええ、そうね。そうかもしれないわ」

リアスは嫌悪の表情で俺を見る。ああ、それだ。

その眼だ。悪魔から畏怖されるその眼。それが私に充足を与える。

「イツセー、カミウチ、貸し一つよ」

「ありがとうございますー！」

「まあ、そうだろうな。恩に切る」

リアスがため息を一つつき、深呼吸をすると場の雰囲気を変えるかのように明るい声で言った。

「さあ、帰りましょうー！いつまでもこんなくさくさした場所にはいられないわー！」

「はいー！」

皆が帰っていく中、私はあえて気配を消してその場に残っていた。

イツセーがこちらを見て静かにだが熱くつぶやく。

「……カミウチ、俺はお前みたいにはならねえ」

「ああ、お前はそれでいい」

俺のようにはなるな。

イツセーは外の光へと出て行く。

私は暗がりの中にいる。